

大江町埋蔵文化財調査報告書 第4集

K-693

山形県西村山郡大江町

# 左沢楯山城遺跡調査報告書

2001

大江町教育委員会

大江町埋蔵文化財調査報告書 第4集

山形県西村山郡大江町

# 左沢楯山城遺跡調査報告書

2001

大江町教育委員会

## 序

殊更に猛暑の続いた今年度の夏、試掘調査を含めて3年目となる「寺屋敷」の発掘調査と実地踏査による縄張図調査が実施され、また、左沢楯山城全体の平面図が完成しました。調査委員の皆様をはじめ、多くの方方のご尽力により今年度も調査の一段の進展をみて、このように立派な報告書が完成されたことに心から感謝申し上げます。

平面図の完成による広大な左沢楯山城を見て、改めてその雄大さに、心ときめきを感じます。また、寺屋敷の発掘調査によって城郭の中に組み込まれた仏堂とそれに伴う苑池遺構を確認し、さらに、遺物として出土された南宋の青磁や白磁等は、当時上流階級によって珍重されたものということで、当時の城中の暮らしの様相がしのばれて、誠に感慨深いものがあります。

このように今年度の各種調査の大きな成果に感謝するとともに、それがさらに来年度の調査の土台として活用されることを期待するものであります。

猛暑の中での調査委員の先生方のご指導、並びにご協力下さった多くの方方に心から感謝申し上げます。また、終始ご指導をして下さっている文化庁及び県文化財課の皆様に対し衷心よりお礼申し上げます。

大江町教育委員会

教育長 清野 昭一郎



左沢楯山城寺屋敷遺構全景

# 例 言

1. 調査名 左沢楯山城遺跡発掘調査
2. 調査期間 左沢楯山城遺跡C地区寺屋敷 2000年8月7日～8月30日（3次調査）  
2000年11月13日～11月19日（4次調査）
3. 調査面積 C地区寺屋敷465m<sup>2</sup>
4. 調査体制
  - ・調査主体 山形県大江町教育委員会
  - ・発掘調査指導 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館長 川崎利夫
  - ・執行体制 左沢楯山城遺跡関連調査委員会

|      |         |                        |
|------|---------|------------------------|
| 顧問   | 入間田 宣 夫 | 東北大学東北アジア研究センター教授      |
| 委員長  | 伊 藤 清 郎 | 山形大学教育学部助教授            |
| 副委員長 | 高 山 法 彦 | 大江町文化財保護委員会委員長         |
| 事務局長 | 鈴 木 勲   | 西村山地方事務所青少年専門員         |
| 委員   | 北 畠 教 爾 | 河北町文化財保護審議会委員          |
| 委員   | 金 山 耕 三 | 山形県立荒砥高等学校校長           |
| 委員   | 誉 田 慶 信 | 岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科助教授 |
| 委員   | 大 場 雅 之 | 山形県企業振興公社              |
| 委員   | 松 田 進   | 大江町文化財保護委員会副委員長        |
| 委員   | 沓 沢 喜代次 | 大江町文化財保護委員会委員          |
| 委員   | 犬 飼 安太郎 | 大江町文化財保護委員会委員          |
| 委員   | 柏 倉 昇   | 大江町文化財保護委員会委員          |

- ・事務局 山形県大江町教育委員会社会教育課  
前課長／伊藤 仁  
課長／木村 誠（平成13年1月1日より）  
課長補佐／園岡 正一  
係長／佐藤 光子  
主事／日下部 美紀（現場担当）  
非常勤／村上 宗紀（現場担当）
5. 縄張図作成 大場 雅之
  6. 遺構写真撮影 村上 宗紀
  7. 実測及びトレース 日下部 美紀
  8. 航空写真撮影・平面図作成 アジア航測株式会社
  9. 本書の執筆
    - はじめに／北 畠 教 爾
    - 第1章／日下部 美紀(第1・2節)・川崎利夫(第3・4節)
    - 第2章／大 場 雅 之(第1節)・日下部 美 紀(第2節)
    - 第3章／鈴 木 勲
  10. 現地調査における参加者は下記のとおりである。  
大江町シルバー人材センター 安全就業指導員／太 田 進  
作業員(シルバー人材センター) 松田長松・林 平司・松田正一  
(山形大学) 大場恵一・亀井一寿・奥山 敦・小平芳宏  
渡辺由華・鶴田朋子・市川政子・柏倉志保
  11. 本調査は、平成10年度から国宝重要文化財等保存整備として文化庁より補助を受けての補助事業である。また、山形県教育庁文化財課からの助言を得ている。
  12. 調査における図面・写真・遺物はすべて大江町教育委員会で保管している。

## 本文目次

|                     |    |
|---------------------|----|
| はじめに ー大江氏の領主的性格ー    | 1  |
| 第1章 寺屋敷の調査          | 4  |
| 第1節 遺跡の立地と環境        | 4  |
| 第2節 調査経緯と調査方法       | 6  |
| 第3節 発掘調査により発見された遺構  | 7  |
| 第4節 出土遺物            | 11 |
| 第2章 縄張図調査と平面図作成     | 15 |
| 第1節 C地区（八幡座周辺）縄張図調査 | 15 |
| 第2節 左沢楯山城遺跡平面図作成    | 16 |
| 第3章 成果と課題           | 21 |
| 第1節 今年度調査の成果        | 21 |
| 1. 発掘調査の成果          |    |
| 2. 縄張図調査の成果         |    |
| 第2節 次年度以降調査の課題      | 22 |
| 1. 発掘調査の課題          |    |
| 2. 縄張図調査の課題         |    |

## 図版目次

|      |                    |    |
|------|--------------------|----|
| 第1図  | 大江町主要部と遺跡位置図       | 4  |
| 第2図  | 左沢楯山城遺跡調査概要図       | 5  |
| 第3図  | 寺屋敷トレンチ・グリッド配置図    | 6  |
| 第4図  | 寺屋敷建物遺構配置図（SB1・2）  | 7  |
| 第5図① | 寺屋敷苑池遺構配置図         | 8  |
| 第5図② | 寺屋敷遺構（G1～8グリッド）配置図 | 9  |
| 第6図  | 寺屋敷遺構主要部断面図        | 10 |
| 第7図  | 遺物実測図（写真5須恵器）      | 12 |
| 第8図  | C地区（八幡座周辺）縄張図      | 17 |
| 第9図  | 左沢楯山城遺跡平面図         | 19 |

## 写真目次

|      |                |    |
|------|----------------|----|
| 写真1① | 左沢楯山城遺跡寺屋敷周辺風景 | 1  |
| ②    | 左沢楯山城遺跡調査鍬入式   | 3  |
| 写真2  | 左沢楯山城遺跡全景      | 5  |
| 写真3① | 寺屋敷苑池遺構全景      | 10 |
| ②    | 寺屋敷苑池遺構        | 10 |
| ③    | 寺屋敷苑池遺構        | 10 |
| 写真4  | 柱穴検出状況         | 11 |
| 写真5  | 出土遺物           | 12 |
| 写真6  | 寺屋敷発掘調査状況      | 16 |
| 写真7  | 寺屋敷発掘調査現地説明会風景 | 22 |

## はじめに - 大江氏の領主的性格 -

大江広元が、大江町を含む寒河江庄の地頭職を拝領したのは、文治5年（1189）11月とされる（安中坊系図）。いうまでもなく広元は、頼朝の側近として草創期の鎌倉幕府の重鎮であり、その功績は数え切れない。「広元伝説」などといわれるゆえんである。官位などは「（前略）寿永二年従五位上、元暦元年因幡守、文治元年四月正五位下、建久二年四月明法博士並に左衛門大尉に任ぜられ、檢非違使の宣旨を受けたが、間もなく辞任した。以後、兵庫頭、掃部頭、大膳大夫、陸奥守などを歴任し、位は正四位下に昇った。建保五年十一月十日重病のため出家した。法名を覚阿という。その後、嘉禄元年（1225）六月十日没した。七十八歳（後略）」（『国史大辞典』吉川弘文館）と記される。

大江広元は、安中坊系図によると、多田仁綱を目代として寒河江庄の統治にあたらせた。仁綱は寒河江入部の当時は、本楯（寒河江市本楯）に居を構え、のちに吉川（西川町吉川）に移ったといわれる。

大江広元の長子親広は、仁綱を頼って寒河江庄に来往し、この地に骨を埋めたとされる。『吾妻鏡』に記される親広は、すべて源姓である。安中坊系図によると、多田源氏である仁綱の嗣子として源姓を名乗ったとするが、京都政界の実力者源通親の猶子になったことによる。ただし、父広元が、大江氏で生を受けながら、中原廣季の養子になり、活躍期の多くを中原氏で過し、建保4年（1216）壬6月に勅許を得て大江姓に復帰した（『吾妻鏡』建保四年閏六月十四日条）時に、親広も大江姓に戻っている（『鎌倉遺文』2252）。



写真1 ①左沢楯山城遺跡寺屋敷周辺風景

鎌倉における親広は、將軍実朝の側近中の側近とってよい。承久元年（1219）正月27日、鶴岡八幡宮において、右大臣拝賀の神拝ののち、実朝が暗殺された翌日、『吾妻鏡』には、將軍薨御の哀傷にたえず、出家した御家人百餘輩の筆頭に、親広そして弟時廣の名が記されている。

実朝が暗殺されて、政権の中枢から離された親広は、同年2月29日京都守護として上洛する。承久3年（1221）6月14日「関寺辺において零落す」と記されるまでの親広は、『吾妻鏡』には、七条院三条御所の放火犯追捕の指示が与えられた他は、親広が官軍に応じた報告がなされているだけである。

安中坊系図ほか地元の史料は、承久合戦を落ちのびた親広は、数少ない家臣とともに寒河江庄に落ちのびたという。『吾妻鏡』には、親広の失踪後も、親広の長子佐房や一族が、北条政子や九条頼経などの側近くに勤仕している様子が記されている。

寒河江庄に関して言えば、源姓を名乗って父広元から独立して別家をおこしていた親広は、寒河江庄ほかを貰っていたが、承久の乱で京都方に加わって没収された。ただ父広元の功績、佐房ら親広の子供らが京方に加担しなかったことなどで許され、寒河江庄は確保され、親広の子に相伝されたというべきであろうか。ただ、親広は、かつて寒河江庄の地頭に補任されたか否かは問題のある所としても、親広の子孫が領有したことは明らかである。

建治元年（1275）5月の「六条八幡宮造営注文」（国立歴史民俗博物館所蔵文書）には、広元の長子親広の跡（後継者）、すなわち親広の血筋の系譜の存続が確認される。六条八幡宮は、京都にあった源義家・為義の邸宅の中に勧請された源氏の守護神で、頼朝が復興したものであった。復興後の当八幡宮の別当は、初代が大江広元の弟季厳、二代は広元の外孫実深、三代は広元の甥教厳で、広元との関係も深い。この造営注文の史料は、鎌倉幕府が全国の御家人472名に命令して再建のための費用を徴収したものであった。広元の子孫では「長井左衛門大夫入道（時広・泰秀カ）跡百八十貫文」、「少輔入道（大江親広カ）跡十五貫文」、「那波刑部少輔（政茂カ）跡三十貫文」、「毛利右近入道（経光カ）跡二十貫文」の如く記されている。この四兄弟の合計分は、足利氏を凌駕して、北条一族につぐものであった。

前にふれたように、寒河江庄内ではじめに多田仁綱が構えた開発経営の拠点、本楯であった。ついで吉川の安中坊屋敷が統治の拠点となり、親広も後には、吉川に身を寄せたとされる。

吉川には阿弥陀堂（屋敷）がある。これは親広は父広元の死を聞き、鎌倉の長子佐房に命じて、阿弥陀如来像を造立し、それに父広元の遺骨を分骨させて、その胎内に収め、その阿弥陀如来像を祀ったものという。親広は仁治2年（1241）12月15日にその生涯を閉じ、阿弥陀堂に埋納されたと伝えられる。

親広没後の寒河江庄は、『尊卑分脈』によると、親広—広時—政広—元顕—元政—時茂—時氏—元時（以下略）と相伝される。安中坊など地元系図では、親広と広時の間に、広時の兄高元と、高元早世の後その未亡人に一期知行を許した時期を入れており、広時が相続した北寒河江庄（現河北町域に相当カ）が没収されたと記している。北寒河江庄は得宗領になった。



大江氏が寒河江庄に上着するのは、元顕からである。13世紀末と考えられる。元顕の長子元政は、南北朝動乱の中で「羽州宮方」（諸系図）として討死し、そのあと、時茂は斯波兼顕の北朝勢力に対して、防備を固める方策を急いだと記される。

「元弘建武の乱以来、天下ことごとく戦となり国に干戈止むこと無し、よって時茂、子孫兄弟に分配し、境域を定めてこれを鎮む、白岩・柴橋・寒河江・左沢・溝延・小泉・高屋・荻袋・見附などの墨也」（「金仲山眼明阿弥陀尊略縁起」）の記録が示す通りであったのだろうか。この文によれば、大江一族の寒河江庄内の分布は、南北朝動乱の中で、明確な意志にもとづいて分割がおこなわれたものであった。

上記の記録のうち、各種系図その他に城と見えるのは、寒河江・溝延・白岩・左沢の四城であり、他は楯・館を称している。

時茂の長子茂信が溝延城を、三男元時が左沢城を、四男時氏が寒河江城を、白岩城は茂信の子家広・政広が築いた。なお白岩城については、各系図間に多少の差異はあるが、溝延と白岩の関係が深いことがうかがえる。

左沢楯山城が、時茂の三男元時の築城とする所は、諸系図が一致する。『尊卑分脈』には、左沢初代元時の所に「左沢」と頭注がある。『安中坊系図』には、「蔵人弾正忠／奉仕南朝／号左沢／於漆川自害」と註記され、元時は、正平23年（1368）漆川の戦で北朝方斯波兼頼軍に敗れ、溝延茂信ら大江一族61人が自害した時、その一人であったことを示している。

左沢楯山城の築城は、早くとも14世紀半ば過ぎと考えられ、城主は、元時—氏政—満廣—時高—頼廣—政勝—満政—氏政—政周と続く。最後の政周は、政勝の三男で永正11年（1514）最上方に組みし、伊達植宗軍と長谷堂（山形市）に戦って戦死したことが知られる。大江の諸系図には、政周のあとの左沢楯山城主の系譜を辿ることができない。しかし天正2年（1574）には、左沢楯山城主が、伊達方に助力して反最上義光勢力として立働く様子が記されている（「性山公治家記録」・「伊達輝宗日記」）。

左沢楯山城の調査は、年次を重ねるにつれてその全容を明らかにしつつあるが、成立の経過などからも、溝延城や白岩城との比較検討も、これまで以上に試みられるべきであろう。



写真1② 左沢楯山城遺跡調査鋤入式

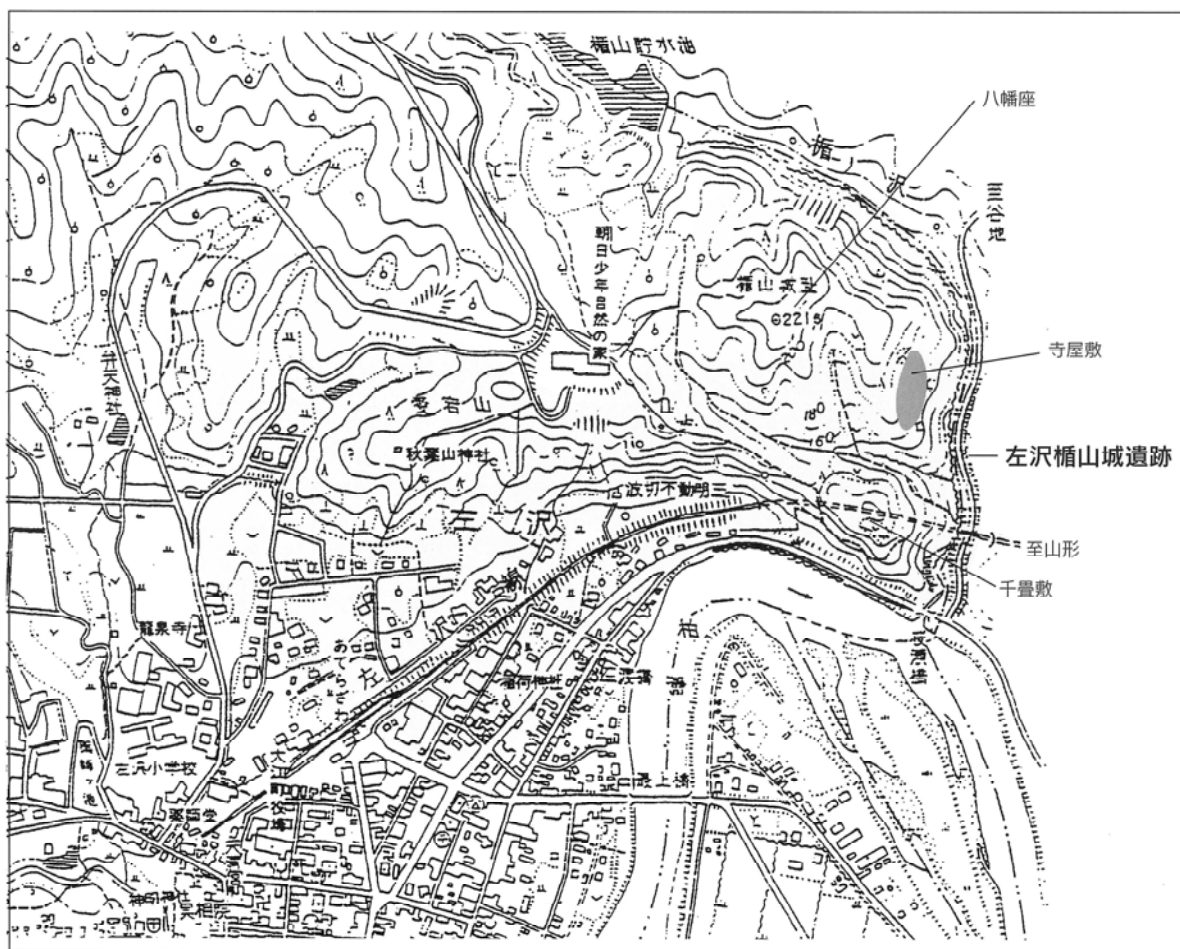
# 第1章 寺屋敷の調査

## 第1節 遺跡の立地と環境

寺屋敷は、左沢楯山城遺跡最頂部である八幡座（標高221.4メートル）の東側に位置している。標高は167メートル前後で、面積は465平方メートルの広大な平場を形成している。八幡座の約200メートル東に位置し、楯山城の東から北へのびる桜木沢に望んでいる。東側に開けているこの場所からは、桜木沢、楯山配水池、県道大江・寒河江線を隔てて、柴橋地区の平野山まで望むことができる。

寺屋敷の東側には、2～3段の曲輪が連なっており、西側には山頂より下る尾根に10段もの曲輪が階段状に連なり、それが南から東へ延びている。寺屋敷は三方がこのような曲輪群に囲まれた平坦地であるとともに、ここも一つの広大な曲輪と見ることができるであろう。

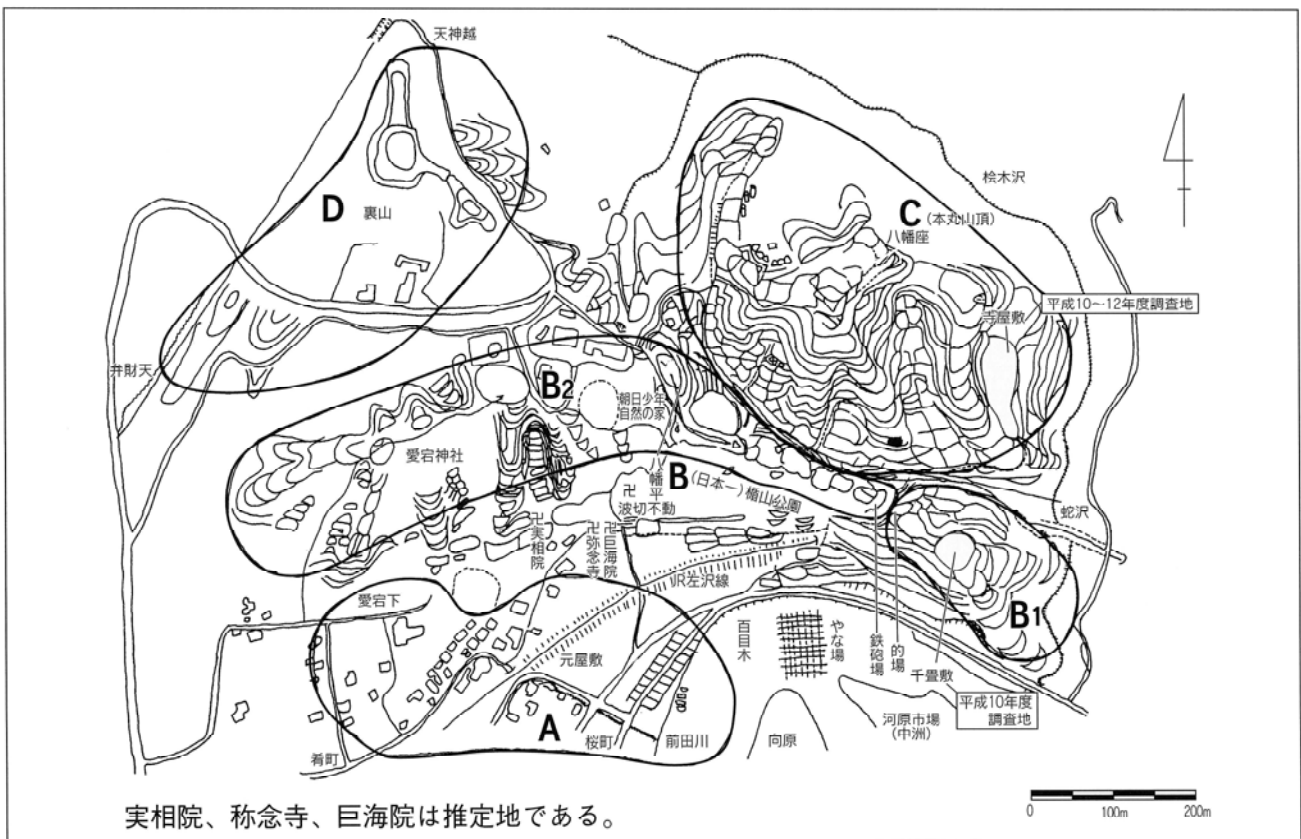
当時真言宗であった巨海院は柴橋落衣（寒河江市）の北、寺山の大門跡付近からこの場所に移されたことが寺伝として伝えられている。それは、南北朝時代の正平年間（1346～1369）頃と考えられるが、楯山が山城として機能していた時期に寺院施設をとり込んで、この地に移建されたと考えられる。「寺屋敷」という地名は、このような事情に由来する。



第1図 大江町主要部と遺跡位置図



写真2 左沢楯山城遺跡全景



実相院、称念寺、巨海院は推定地である。

第2図 左沢楯山城遺跡調査概要図

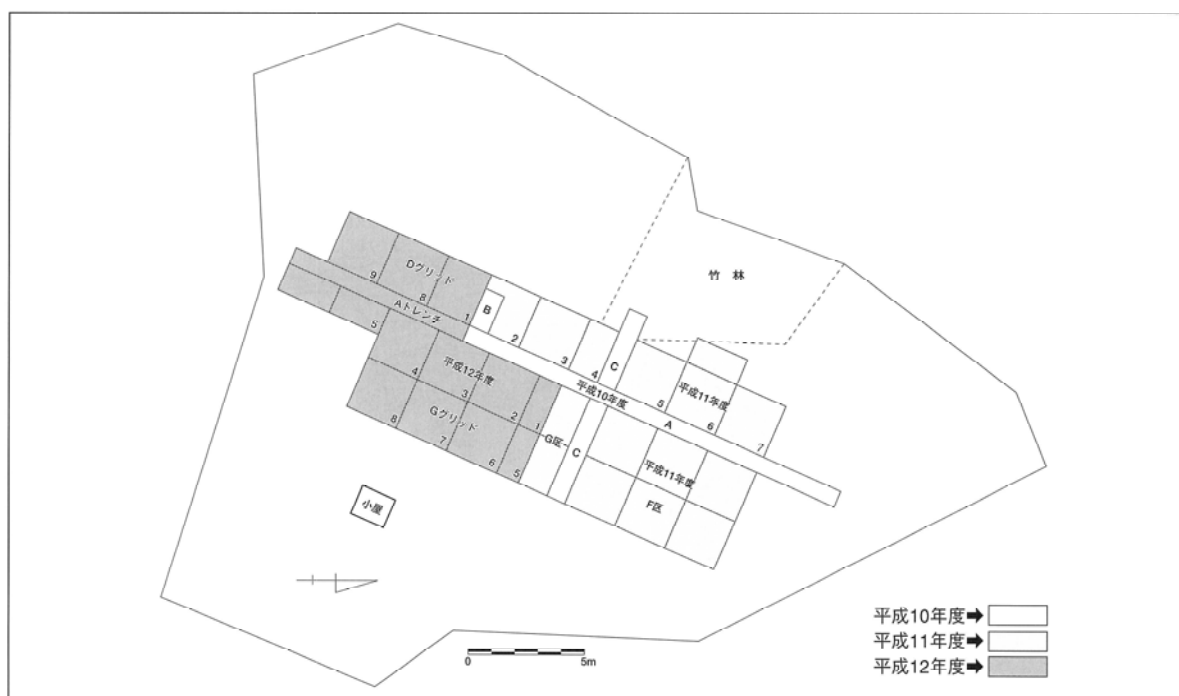
## 第2節 調査経緯と調査方法

「寺屋敷」の調査は、平成10年度の試掘調査から4次にわたる調査を実施してきた。

今年度の現場での発掘調査（3次調査）は8月7日から8月30日までの実働13日、試掘調査（4次調査）は11月13日から19日までの実働6日である。平成10年度の試掘調査により遺跡の中心部にA～Cの三つのトレンチを設定した。この調査からは、地表下40～50センチメートルの岩盤や黄褐色粘質土にくい込む角柱や円柱の掘立柱柱穴が41カ所検出された。径25～40センチメートル、深さ20～30センチメートルで、岩盤を掘り込んだものであった。

平成11年度は、この試掘調査をもとにA～Cトレンチを中心にAトレンチの西側に4メートル四方の6つのグリッド（D2～7）をAトレンチに平行して設定し、東側に8×16メートルの8つのグリッド（F区・G区）を設定した。D5～7を含むF区より良好な柱列配置の建物跡が検出された。仏堂と思われるその建物跡の検出を中心に調査を進めた。

そして平成12年度発掘調査（3次調査）は、これまでの調査をもとにグリッドを設定した。一つはAトレンチ東側のグリッドG区（平成11年度調査区）に続く8×14メートルの8つのグリッド（G1～8）を設定し、二つはAトレンチ西側のグリッドD（平成11年度発掘区）に続く2つのグリッド（D1・8）、三つは平成10年度の調査区Aトレンチを南に1.5メートル×8メートル拡張した。G区（G1・2・5・6）からは16カ所の柱穴が検出された。また、G区（G4・8）からは、排水溝と思われる遺構を確認した。そして、D1・8及びAトレンチからは苑池遺構と思われる石組遺構、それに付随すると考えられる建物の柱穴群が検出された。その検出された柱穴群がさらに広がる可能性があることからAトレンチに平行するように、G4グリッドに続いて2メートル×4メートル（G9グリッド）拡張していき、柱穴群を確認した。試掘調査（4次調査）では、D1・8グリッドより検出された石組遺構に続くような遺構が一部表れていたことから、D8グリッドに続いて4メートル×4メートルのグリッド（D9グリッド）を設定した。このグリッドからは、さらに石組遺構が検出された。また、AトレンチとG5の南側に、4メートル×3.5メートルのグリッドを設定し、柱穴群を確認した。



第3図 寺屋敷トレンチ・グリッド配置図

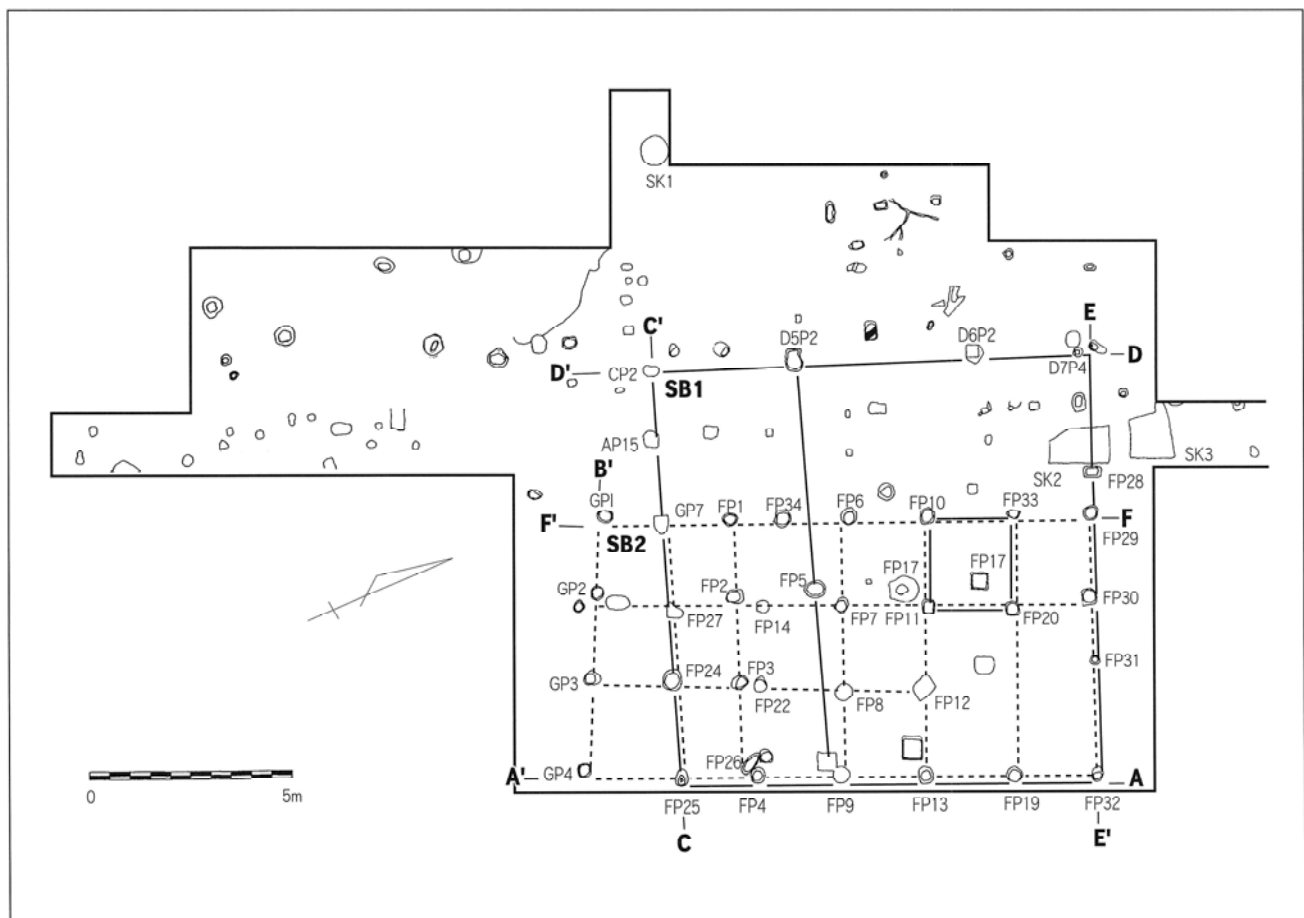
この検出された柱穴群の性格については、明らかではないので今後の拡張調査が望まれる。また、苑池遺構が確認されたことは平成12年度調査の大きな成果である。

### 第3節 発掘調査により発見された遺構

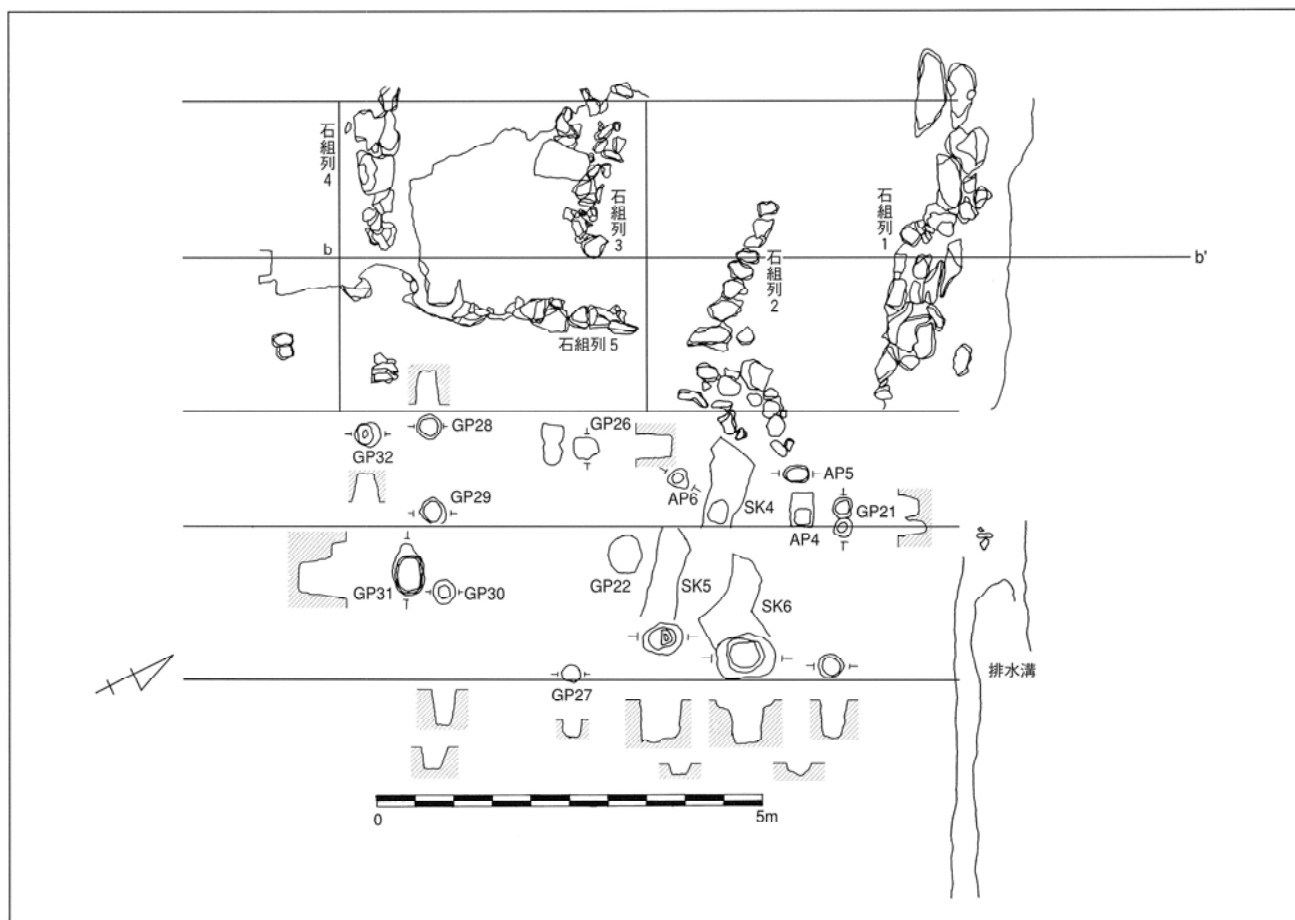
この度の発掘調査の対象となった寺屋敷は楯山城の鬼門にあたる場所と考えられる。天文11年（1542）に、現在の楯山城南麓に移された曹洞宗鉄圀山巨海院は、それ以前は楯山城中の寺屋敷にあり（『宗古録』江戸時代の記録）、真言宗であったことが巨海院寺伝として伝えられる。

平成11年の発掘において、寺屋敷北側の一角より5間×5間の掘立柱建物跡（SB1）が検出されたが、これが旧巨海院であった可能性がある。ここに建てられた建物は、その後城下の整備にともない現在地に移転される。この建物の跡に、これと重なる形で桁行6間、梁間3間の南北棟がある。総柱で倉庫風の建物であるが、このSB2は、巨海院移転後にその跡に建てられた城郭の施設の一部と考えられ、16世紀後半の年代が推定される。

平成12年度は、10年度に試掘溝として設けられた南北に長いAトレンチより東と西のグリッドを掘りすすめた。SB1やSB2の建物跡南側より16個の柱穴などのピット群があらわれた。径30～40センチメートル、深さ20～40センチメートル程度で、掘方はいたって小さい。柱径は15～20センチメートル程度と推定されるが、GP5よりGP20までの柱穴群からまとまった建物跡を想定することはできない。梁間を2間とする東西棟があったと考えられるが、東側にさらに柱穴が伸びると考えられるので、グリッドを拡張し精査する必要がある。



第4図 寺屋敷建物遺構配置図(SB1・2)



第5図① 左沢楯山城遺跡(寺屋敷)流水遺構跡

Aトレンチの西側にD1・8の2つのグリッドに発掘区を設定し、掘り下げる段階で地表下25～30センチメートルより下部に落ち込む感触を得た。それはほぼ東西に直線状に地下に下がっていく状態で、当初は寺屋敷の遺構の前面に設けられた空壕状遺構かと思われた。ところが西から東へむかって張り出す石列群が現われ、石列は東へむかって4メートル続いていた(石組列1)。人頭大から50センチメートル程度の不整形凝灰岩の割石群である。この山より産出される石である。そのさらに南側は深く落ち込み、底面より有機質で細粒の黒色土が2～3センチメートル程度埋積し、その下部に灰白色の粘土がうすく敷いてある状況が観察された。このような落ち込みが東西3メートル余り、南北2メートルにわたりほぼ不整形に広がっている。そして石列群より2メートルほど南に、さらに石列が一個ずつ列をなして東にのびる。その先端には径10～15センチメートルほどの川原石が3個並んでいた(石組列2)。おそらく落ち込んでくぼみを見せる両石列によって囲まれた部分は、流水を溜める苑池遺構と考えられ、平坦な底面に粘土を貼り、その上の黒色有機土はそこに溜った泥であろうと思われる。

これだけならば小さな水をたたえる池と考えられるが、さらに南側にグリッドを拡張発掘する中で、東側に張り出すもう一列の石組列が見つかり、その中には80×50センチメートルのつくばい状の台石も含んでいる(石組列3)。それにこの苑池遺構の東辺を画す石列が南北に並び、(石組列5)南辺を画する東西の石列群も確認された(石組列4)。おそらくこの遺構は南北6.5メートル、東西3メートル以上のほぼ不整形長方形を呈する池で、池の中に東より張り出す石列帯と西より張り立つ石組列があることが明らかになった。但し西側を画する縁石列はまだ明らかではないが、拡張発掘によって現れるものと思われる。底部は平坦で深さは現地表面より1メートル、旧表土から50～60センチメートル掘り込み、底面は平に掘削されている。

それにこの池から溜った水を排水する幅20～30センチメートル、深さ10センチメートル程度の溝が真直に東側の切岸に向かって伸びることが判明した。そして、この苑池遺構のすぐ東側には10数カ所に柱穴があり、池に伴う建物があったことは明らかである。その規模や性格については、もう少し東側に発掘区を拡大することによって確かめられるが現状では不明である。

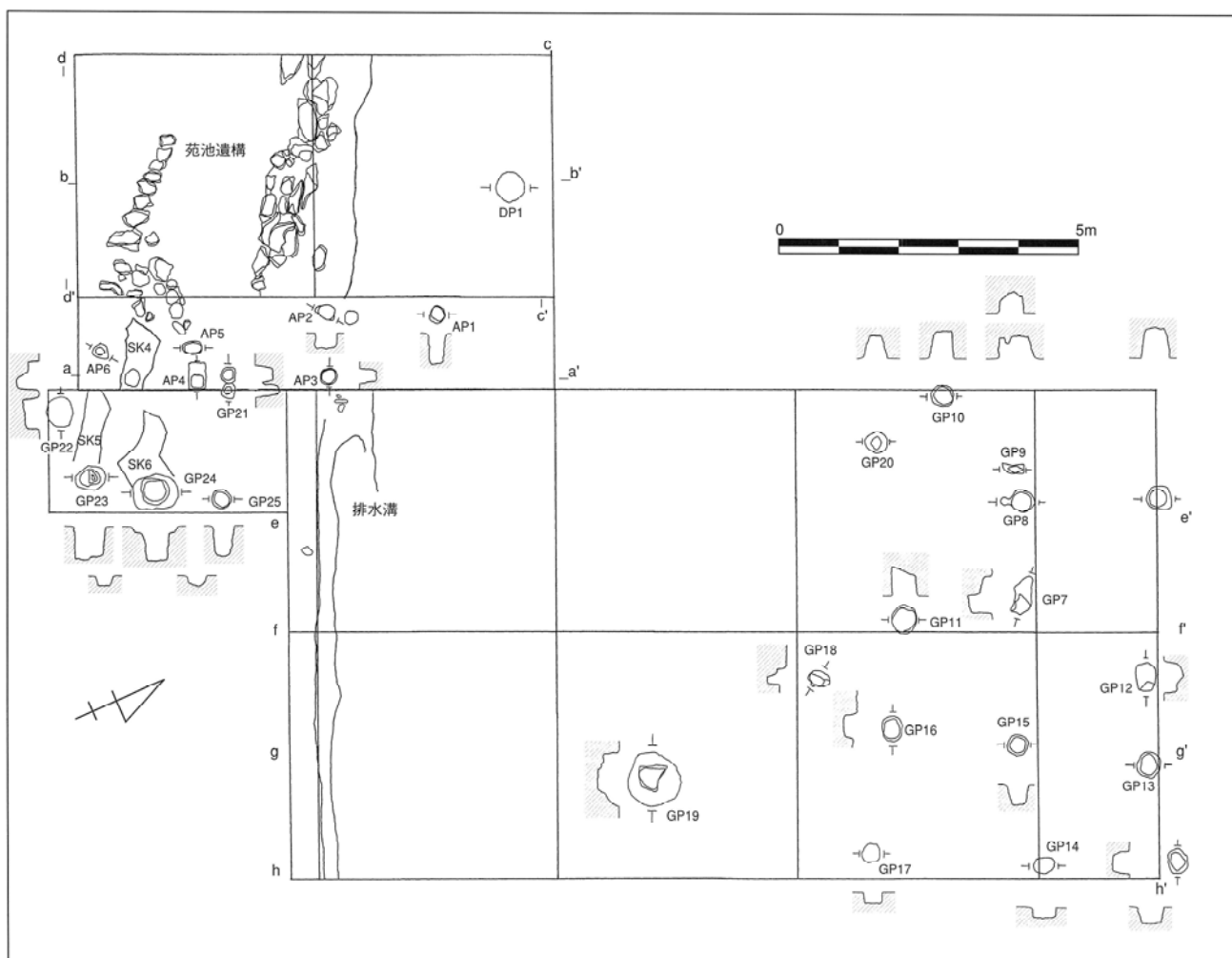
以上のように石組を伴うこの遺構は、排水溝や基盤層を掘りくぼめて底面に粘土を貼ったり、堆積した黒色有機土の存在などから苑池遺構であることは明らかである。

おそらくこの池は、寺院があった頃その前面に設けられた苑池で、本堂の前面に池が営まれる例は今でも多く見られる。5間5面の仏堂があった時代の苑池とすれば、16世紀前半代と考えられる。

水を溜める池とすれば、排水溝は判明したが、どこからどのようにして集水したのか。おそらく「横井戸」といわれるような施設を通して、上から流下する雨水などを集水し流し込んだと思われるが、その集水施設もあったものと思われる。

今後さらに苑池遺構の周辺部に発掘区を拡大し、池の全容を明らかにし、そのほとりにあった掘立柱建物の状況も把握することが必要である。それに付随して、池の水を溜める工法がどのようになされているかその解明も課題といえよう。

今次の調査によって、城郭の中に組み込まれた仏堂とそれに伴う苑池遺構が確認されたことは大きな成果である。



第5図② 寺屋敷遺構(G 1～9、D1・8グリッド、Aトレンチ)配置図



写真3① 寺屋敷苑池遺構全景

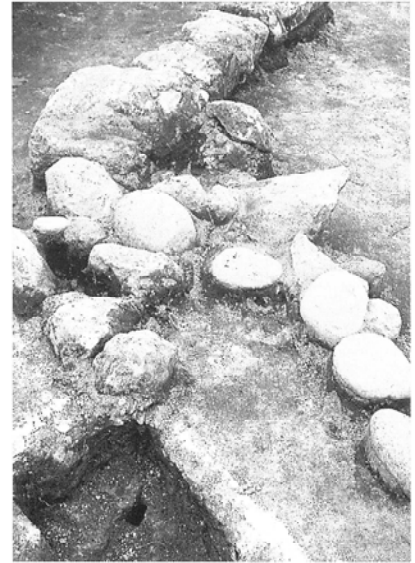


写真3② 寺屋敷苑池遺構 石組列2より

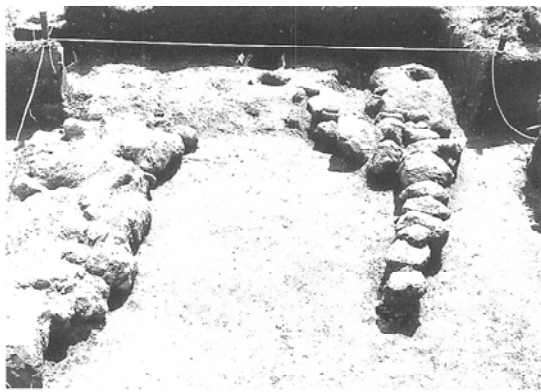
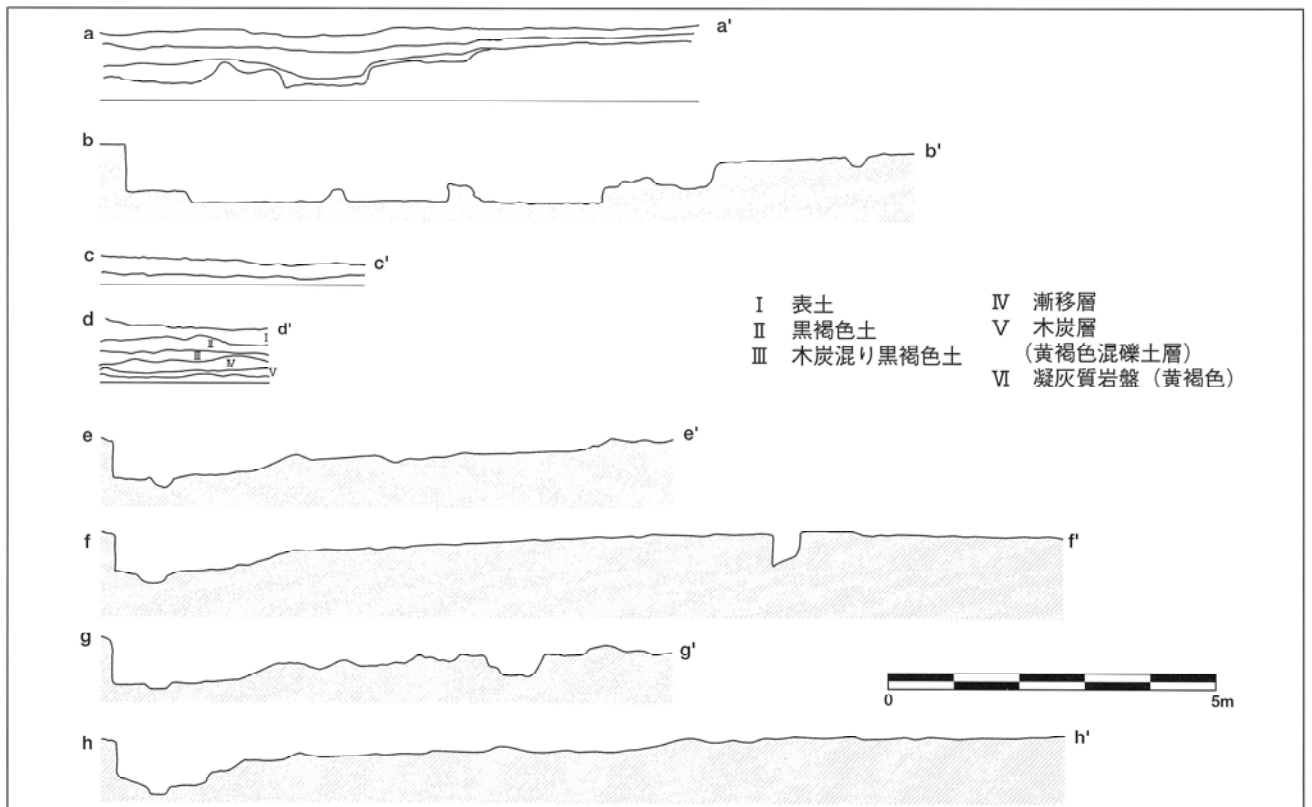


写真3② 寺屋敷苑池遺構 石組列1(左)  
石組列2(右)

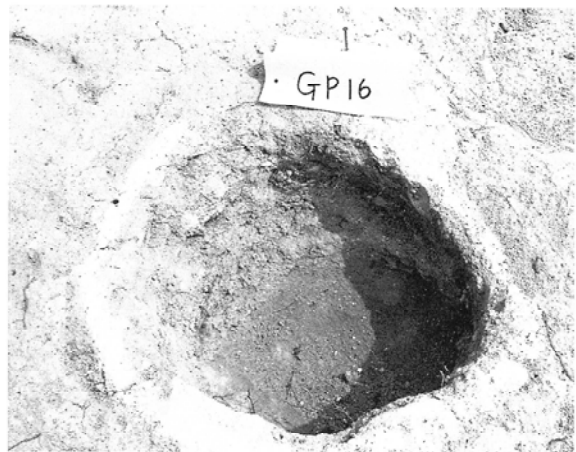


第6図 寺屋敷遺構主要部断面図

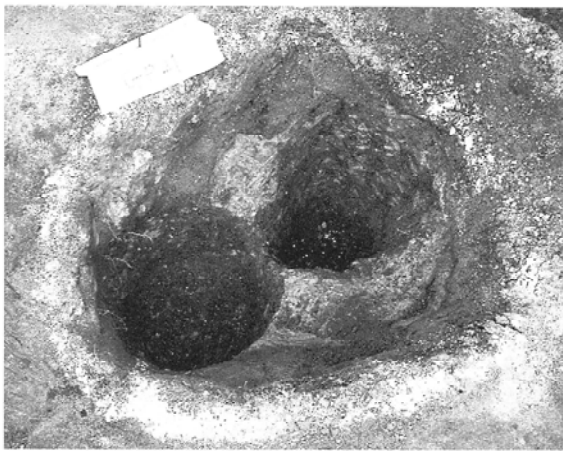




写真4 柱穴検出状況 GP15



GP16



GP21



GP25

## 第4節 出土遺物

これまでの発掘でも出土遺構はきわめて少量であるが、今次調査の寺屋敷の南側苑池遺構とその周辺でも少量であった。しかし寺屋敷と苑池遺構にふさわしく、しかも年代的に合致する陶磁器破片の出土があった。

まず須恵器の坏の破片があり、これは全形を知ることができるが、灰白色を呈し、口径15.8センチメートル、高さ4.2センチメートル、底部糸切痕を残すもので、ここより南に位置する大江町藤田窯の製品で、9世紀後半より10世紀前半の古代の須恵器である。直接には発掘された中世の遺構とは関連がない。

苑池遺構の周辺より発見されたもので、青磁や白磁の輸入磁器の小破片がある。青磁破片は翠色を呈し、内面に鑄ぎ蓮弁が認められる高台付皿の破片で、釉は比較的薄い、13～14世紀に中国の浙江・福建省あたりで造られた磁器で、室町時代に天龍寺船や青森県十三湊などを経て輸入されて、戦国大名の館跡などからの出土例が多い。南宋の青磁で、県内でも藤島城・小田島城・白鳥城下・米沢城などより出土している。

これと同時期と思われる白磁皿で高台付の小破片もあり、この内面には重ね焼きの痕跡が明瞭である。他に黄釉によるつまみ付の蓋の破片、褐釉の燈明皿の一部、伊万里系染付による磁器破片などもある。

いずれも16～17世紀の陶磁片であり、古代の須恵器を除いては、発見された遺構と何らかの関連を有する遺物であろう。とくに当時上流階層によって珍重された南宋の青磁や白磁が発見されたことは、小破片でありながらこの遺構の性格を示すものとして重要である。これまでの発掘において、このような

遺物の発見は初めてである。

他に、鉄製の箸状のものが出土している。長さ27センチメートルである。年代は特定できない。

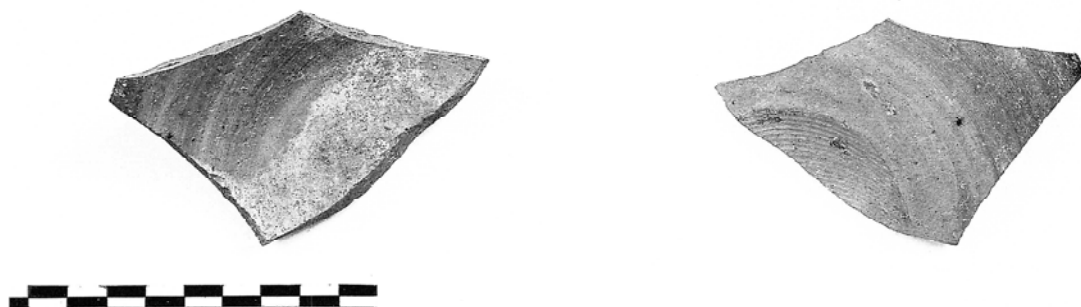
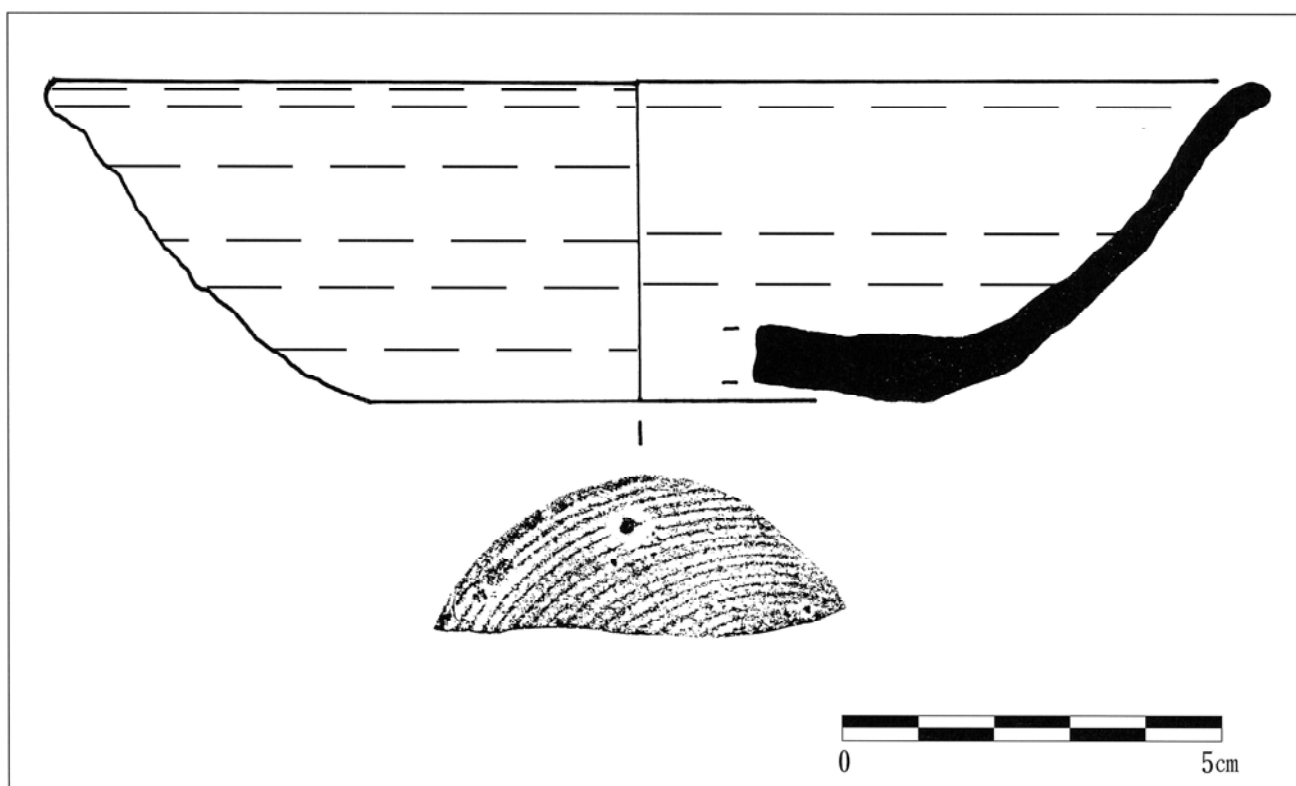


写真5 出土遺物①須恵器



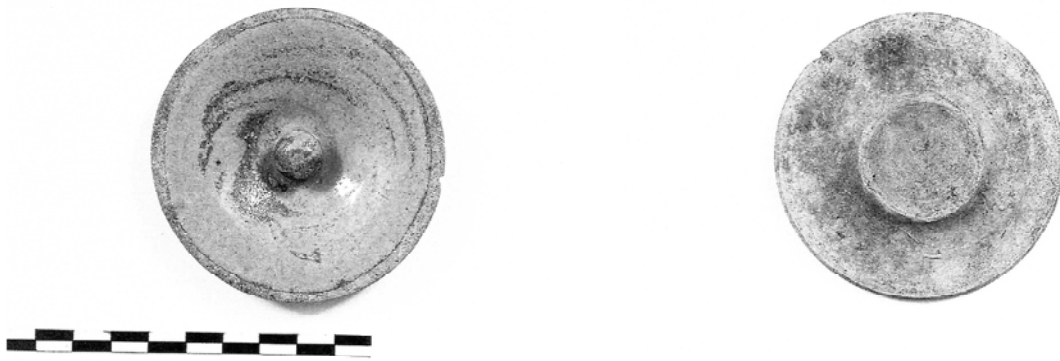
第7図 遺物実測図(写真5 須恵器)



②青磁



③白磁



④蓋



⑤火簀



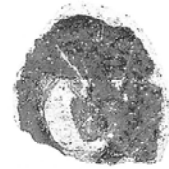
⑥鉄釘



⑦蓋のつまみ部分（上より）



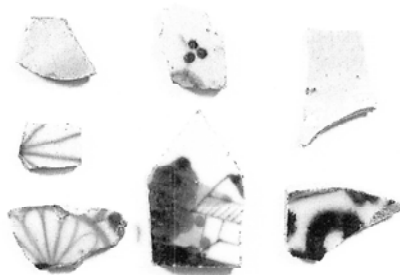
（横より）



（下より）



⑧その他陶磁器小破片



⑨その他陶磁器小破片



## 第2章 縄張図調査と平面図作成

### 第1節 C地区（八幡座周辺）縄張図調査

本年度調査を実施した八幡座周辺は、これまでに調査を行ったB地区「八幡平（b）及び千畳敷周辺」の蛇沢を挟んだ北側および寺屋敷の尾根を経た西側に位置している。背後である北面を深い桧木沢（楯の沢）の谷に守られ、蛇沢に向かう4本の尾根とそれに囲まれた谷には幾重にも展開された曲輪を有する、左沢楯山城の中心部と考えられている地区である。

本城の最頂部（標高221.4メートル）の曲輪Ⅰは通称八幡座と呼ばれ、かつて八幡宮が祀られていたと伝えられる。また、八幡座とは中世後期以降の俗称として兜の鉢の頂点（天辺）を意味しており、それを城の頂上にあてたとも考えられる。現に、朝日町の真木山城や鶴岡市の尾浦城をはじめ、県内外の特に大規模な城郭に八幡座（尾浦城では八幡台）の名称が確認できる。ところで、その曲輪Ⅰは8メートル四方形の狭小な曲輪であり、左沢楯山城の政治的・軍事的中心となる曲輪と考えるには不十分と言わざるを得ない。したがって、曲輪Ⅰには社や祠など信仰的建築物または櫓などの城の象徴的な施設を配置し、それを支える曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、一帯をもって中心と考えるべきであろう。

曲輪Ⅰの南東には虎口（ア）があり、そこから北東へ曲輪一段を経て曲輪Ⅱに至る。十分小屋掛け可能な曲輪Ⅱは、北面への備えの要であるばかりでなく、北東隅より東に折れる尾根に築かれた数段の腰曲輪を経由して曲輪Ⅰに至る、東の曲輪Ⅴおよび深く入り込んだ谷（c）からのルートを押さえる役割を果たしている。また、曲輪Ⅲ方面に対しては自然地形を利用したと思われる2列の縦堀（カ）により斜面の移動を阻んでおり、防御の対象ルートを絞り込んでいる。

曲輪Ⅱの東に位置する平坦な尾根上に整備された広大な曲輪Ⅴは、段差により区画されており、数基の何らかの建造物が建っていたことが容易に推測できる。そして、谷（c）および寺屋敷（a）に侵攻してきた敵は、この曲輪より頭上から攻撃を受けることになるだろう。尾根は曲輪の東端から直角に南下し、急峻な切岸を持つ5段の曲輪が連なり曲輪Ⅵに至る。25メートル四方形の面積を有する曲輪Ⅵは、寺屋敷（a）を見下ろし、蛇沢の道から箱堀（キ）を通過する人々を望める好位置である。県外には、このような曲輪に迎賓用の施設を設けている城があるとの報告があり、興味深い。なお、西側には虎口（イ）が設けられ、当時からのものかは不明だが谷間の曲輪からのルートが確認された。

南備えの要となる曲輪Ⅲからは、さらに南に向かい尾根が左右に分かれている。東側の尾根からは、小さい腰曲輪数段と虎口（ウ）を経て曲輪Ⅶに至り、さらに沢まで曲輪が連続する。西側の尾根は、三方に虎口を備えた曲輪Ⅷより沢まで10段ほどの曲輪を有する。これらの尾根に築かれた曲輪群からは、絶えず両側の谷を進む敵に対して挟撃できるように配慮されている。また、尾根を進む敵に対しては、幾重にも帯曲輪・腰曲輪を配する周到ぶりである。

曲輪Ⅳ周辺は、西への備えであると同時に、八幡平との連絡を確保するという意味からも重要な曲輪群である。畑地等への利用により後世に多少の手が入っているものの、切岸はしっかりしており、曲輪の配置も巧みである。曲輪Ⅳの南東には虎口（エ）が設けられ、さらに曲輪Ⅲおよび曲輪Ⅰへの連絡も可能である。また、この北側斜面にも数段の曲輪があり、（オ）の尾根までしっかりした曲輪群が形成されている。さらに西に延びた尾根上には、未調査であるが出丸的な遺構を確認している。

このように、中心部から蛇沢に向かっての斜面には悉く曲輪が配備され圧巻である。蛇沢の谷道を通行する人々は、さぞや度肝を抜かれたことであろう。特に中心部の切岸は鋭く、虎口以外から不可能で

ある。また、入り込んだ谷に整備された曲輪群（c・d・e）は、廃城後に果樹栽培のために造られた可能性は否定できないが、横矢掛けを意識した曲輪の構造や曲輪区のように微妙な高低差を設けてある曲輪があることから、当時から何らかの施設があったと思われる。それに対して、北側は桧木沢による自然の要害に頼るのみであり、防御意識の低さが気にかかる。これは、寒河江側からの侵攻は想定されなかったことを裏付けるものであろうか。

さて、本年度までの調査により左沢楯山城における主要な一帯の調査が完了し、その全貌がほぼ明らかとなった。そこには、すさまじいまでの曲輪と堅堀などによりその堅固さを見せつける一方、城域に寺や街道などの共用スペースを取り込むなど、単なる軍事施設だけでない城の姿が浮かび上がってきた。今後は、外郭を成す一帯の調査を実施し本城の全体像を明確にするとともに、左沢楯山城の構成と類似性が指摘されている寒河江市の白岩城などとの比較検討により、それぞれの地区の連携・役割等を解明し左沢楯山城調査の一助としていく。

## 第2節 左沢楯山城遺跡平面図作成

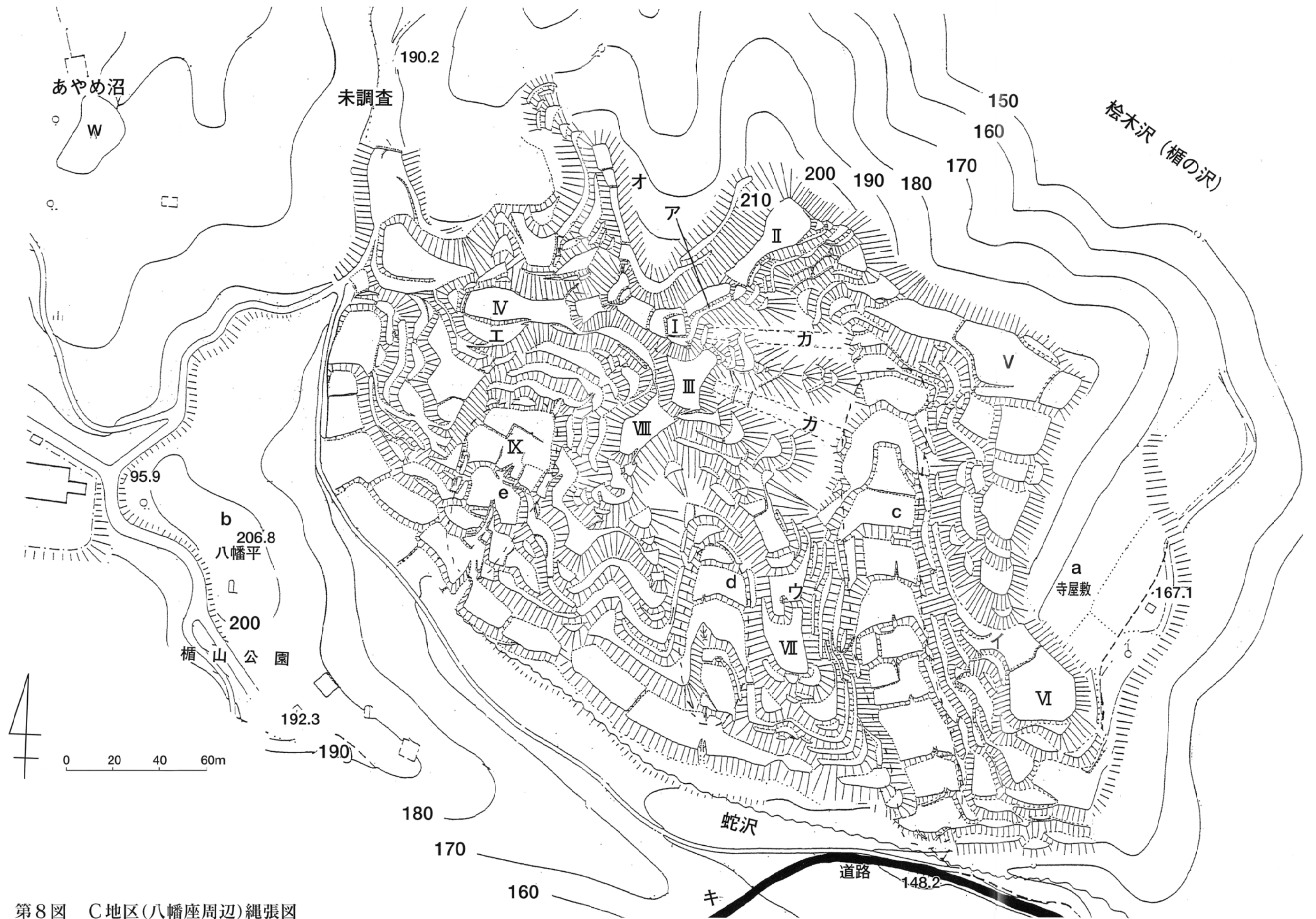
左沢楯山城遺跡の調査は、平成5年に左沢楯山城遺跡検討委員会として始まり、平成6年度に左沢楯山城遺跡関連調査委員会と名称を改めてから現在に至る。文化庁より「国宝重要文化財等保存整備」としての補助金を受けてからの調査（平成10～14年の予定）は、今年度で3年目を向かえる。これまで、発掘・試掘調査、縄張図調査と計画的に調査を進めてきた。今後、左沢楯山城遺跡を保存・整備していくにあたり、その全体像を明らかにしていく必要があるため平面図作成を試みた。この平面図にこれまで調査した成果を加えまた、これからの調査に生かしていきたいと考える。

平面図作成は、平成12年11月より打ち合わせ・協議を行い図化範囲等の確認をしていった。左沢楯山城遺跡の図化範囲を0.76平方キロメートルとし、11月下旬から12月初旬にかけて現地調査に入り、12月から1月と数値図化・編集等を経て2月に「左沢楯山城遺跡平面図」（1/1000）として完成した。（アジア航測株式会社）

この平面図の完成により左沢楯山城の全体像を図面上で把握することができるとともに、平面図に縄張図を合わせることで左沢楯山城遺跡のより巧みな構造を読み取れるのではないだろうかと考える。



写真6 寺屋敷発掘調査状況



第8図 C地区(八幡座周辺)縄張図



第9図 左沢楯山城遺跡平面図



## 第3章 成果と課題

### 第1節 今年度調査の成果

#### 1. 発掘調査の成果

今年度の発掘調査は、昨年度に引き続き、発掘・試掘ともに「寺屋敷」に絞って実施された。寺屋敷の発掘は平成10年度の試掘に始まって、今回が3・4次目に当たるが、このように年次を重ねているのは、この寺屋敷が左沢楯山城跡最大の曲輪であること、平成11年度の調査により、寺屋敷の呼び名にふさわしい5間四方の仏堂が発掘されたことなど、成果を収めているためである。

今年度は、この仏堂の前面（南側）を中心に調査を実施し、5組の石列群に囲まれた苑池遺構を発見することができた。

苑池は流水を溜めた、南北6.5メートル、東西3メートル以上、深さ50～60センチメートルの、不整形長形状の池が中心で、この池に東西両側より石組が張り出す構造となっていた。池の底には、細粒の黒色土が埋積し、その下には灰白の粘土を敷いて漏水を防ぎ、幅20～30センチメートル、深さ10センチメートルの排水溝が、東に向かって真直に掘られていた。

このように城郭の中に取り入れられた仏堂と、それに伴う苑池遺構の確認は、今次調査の最も大きな成果である。

また、今次調査により、16～17世紀の上流階層により珍重されたと考えられている、南宋の青磁・白磁の小片が本調査始まって以来、初めて発見されたが、これも貴重な成果であり、この遺跡の性格を示す遺物として注目されている。

#### 2. 縄張調査の成果

今年度の縄張調査は、左沢楯山城の中心、C地区（八幡座周辺）で行われた。

その結果、最頂部の「八幡座」と呼ばれる曲輪は、8メートル四方の狭小な曲輪であり、政治的・軍事的に中心となる曲輪というよりは、信仰的・象徴的な曲輪と考えられ、それを支えるように三方に伸びるⅡ～Ⅳの曲輪が、全体として一つとなって主郭を形成することが明らかとなった。

さらに、これらの曲輪に続く尾根の延長上には、Ⅴ～Ⅷの強固な曲輪を設け、その周りに帯曲輪や腰曲輪を幾重にも配置するという周到な構造であることや、南の蛇沢に向う3本の尾根と谷の斜面には悉く曲輪が配置され、すさまじいまでの曲輪群で堅固さを誇っていること。反面、北側は桧木沢による自然の要害に頼るだけという対比を見せることなどが解明された。

今年度までのこれらの調査で、左沢楯山城の主要な部分の調査が一段落し、その全容がほぼ解明されたことを喜ぶたい。

## 第2節 次年度以降の課題

### 1. 発掘調査の課題

寺屋敷の発掘で、仏堂や苑池遺構の確認という大きな成果を収めることができたが、池の西側を画する縁石列や池に水を溜める集水施設は、いまだ明らかにされていない。

また、苑池遺構の東南側には、そこに付随すると思われる建物の柱穴群が検出されたが、その性格は不明であり、今後の拡張調査が望まれている。

その一方で、今後とも寺屋敷の発掘調査を継続するのか、それとも左沢楯山城遺跡の全容を明らかにするためにも、C地区曲輪Ⅰ（八幡座）並びにその北側に接する曲輪Ⅱ、B2地区の八幡平曲輪、領主の居館跡や河岸の町並み跡があると思われるA地区の元屋敷・愛宕下などの計画的な発掘調査に着手するかが課題となっている。

### 2. 縄張調査の課題

最も困難であった中心部C地区の縄張図を完成して、縄張調査は大きな山を越えたと言える。

今後は、B2地区（愛宕神社）とその山麓一帯、並びにD地区（裏山）など外郭を形成する地域の調査を行ない、左沢楯山城の全体像を一層明確にする必要があると思われる。

なお、今年度の成果の中に、「左沢楯山城遺跡平面図」（1/1000）の完成がある。この平面図を活用することにより、今後の縄張調査が一層正確で容易になり、左沢楯山城全体の縄張図完成に大きく寄与するものと期待している。

以上、今年度の発掘調査と縄張調査の成果と課題を述べてきたが、今年度の忘れてはならない成果の一つに、寺屋敷発掘調査現地説明会の盛会と、公開講座「左沢楯山城・安中坊から見る大江氏」の開催がある。いずれも100名を大きく超える参加者を集め、左沢楯山城遺跡調査の進展に対する関心の高さを示すものであった。

本調査は、こうした町民の方々並びに研究者の方々のご理解とご協力をいただきながら、大江氏関連の城館遺跡群の中心の一つとして、白岩城や寒河江城、溝延城さらに大江氏の本拠地とされる吉川安中坊遺跡などに関連付けながら、今後とも幅広く解明される必要があると思われる。



写真7 寺屋敷発掘調査現地説明会風景

# 報告書抄録

|        |  |
|--------|--|
| ふりがな   | あてらざわたてやまじょういせき                              |
| 書名     | 左沢楯山城遺跡                                      |
| 副書名    |  |
| 巻次     |  |
| シリーズ名  | 大江町埋蔵文化財調査報告書                                |
| シリーズ番号 | 第4集  |
| 著者名    | 北島 教爾、川崎 利夫、大場 雅之、鈴木 勲、日下部美紀                 |
| 編集機関   | 大江町教育委員会                                     |
| 所在地    | 〒990-1163 山形県西村山郡大江町大字本郷丁373-1 ☎0237-62-3666 |
| 発行年月日  | 2001年3月31日                                   |

| ふりがな<br>所収遺跡名         | ふりがな<br>所在地                        | コード                  |             | 北緯                                | 東経                 | 調査期間   | 調査<br>面積          | 調査原因 |
|-----------------------|------------------------------------|----------------------|-------------|-----------------------------------|--------------------|--|-------------------|------|
|                       |                                    | 市町村                  | 遺跡番号        |                                   |                    |  |                   |      |
| あてらざわたてやまじょう<br>左沢楯山城 | やまがたけんにしむらやまくん<br>山形県西村山郡          | 324                  | 324-<br>001 | 38度<br>23分<br>05秒                 | 140度<br>13分<br>00秒 | 3次調査<br>2000. 8. 9<br>}<br>2000. 9. 6<br><br>4次調査<br>2000. 11. 13<br>}<br>2000. 11. 19 | 465m <sup>2</sup> | 学術調査 |
| てらやしき<br>寺屋敷          | おおえまちおおあざあてらざわあざたてやま<br>大江町大字左沢字楯山 |                      |             |                                   |                    |  |                   |      |
| 種別                    | 主な時代                               | 主な遺構                 |             | 主な遺物                              |                    | 特記事項   |                   |      |
| 城館跡<br>寺院跡            | 16～17世紀                            | 掘立柱建物跡<br>苑池遺構<br>溝跡 |             | 青磁片<br>白磁片<br>染付磁器片<br>須恵器片<br>火箸 |                    | 16世紀前半にこの地<br>にあった巨海院跡にと<br>もなう石組みの苑池遺<br>構（流水施設）が発見<br>された。                           |                   |      |

大江町埋蔵文化財調査報告書 第4集

山形県西村山郡大江町  
左沢楯山城遺跡調査報告書

発行日 平成13年（2001年）3月  
編集 大江町教育委員会  
発行 山形県西村山郡大江町大字左沢882の1  
印刷 株式会社 若月印刷  
山形県西村山郡大江町大字左沢105